

に認識しておく必要がある。イリイチは、〈シャドウ・ワーク〉が懲役や奴隷⁴³、賃労働と異なる独自の束縛の形であることを検証しようとしている。

○イリイチの認識では、今日の〈シャドウ・ワーク〉は、名前もなく、検証もされないまま、あらゆる産業社会で多数者を差別する主要な領域となっており、〈シャドウ・ワーク〉の量は、差別を測るための適切な尺度になり得る。

○仕事^{ワーク}も職^{ジョブ}も、今日では広く知られたキーワードだが⁴⁴、どちらも300年前には、今のように目立つものではなかった。たいていの言語が、有用と考えられるすべての諸活動をまとめて呼べるような単一の語をもたなかった。イリイチはインドネシアやラテン・アメリカ、或いは古典古代のギリシャ人や後期ローマ人、あるいは中世の人々の例⁴⁵を挙げて、その状況を説明している。

○今日、仕事を代表することばである「賃労働」は中世を通じて「惨めさ」の代名詞だった。それは、生産＝消費の場としての家の諸活動、商売人の交易、物乞いとは明確に対立するものだった。

○物乞いする権利は、キリスト教中世の一千年にわたって、けっして異議をはさまれることのなかったものであり、その傍証として、イリイチはヴェローナのラトガー⁴⁶が834年に行った説教を引用している。

——あなた方は自分が弱いことで泣きごとをいっている。むしろ神に感謝しなさい。泣きごとをいわずに、あなたの生活をささえてくれる者たちのために祈りなさい。そこに居るあなた方は、健康であるのに、沢山のガキどもを養わねばならず大変で、などと不平をいっている。それなら、妻を遠ざけるがよい。だが彼女の同意をまず得て、自分自身と他の者を養えるように自分で働くがよい。それができない、とあなた方は言っている。よろしい、それなら、あなた方にとって厄介な自分自身の弱さを宣言するとよい。必要なものを、慎みをもって乞い、よけいなものはすべて差し控えることだ。……病める者の友となり、死につつある者を救い、死者を清めるとよい。(199頁)

○イリイチによると、賃労働にたいする嫌悪は、いまだ(1970年代当時において)世界の多数者がいなく考えと一致するものなのだが、経済学(による考え方)が日常の言語を支配しつつあるため、人々は、徐々に自分の感情を直接に表現することばを見失いつつある。その例証として、イリイチはミュラー氏の招きでドイツにやってきた23歳のメキシコ人青年ミグェルの話を紹介している。

○そのミグェルの眼に映ったドイツの人々、そしてそれに代表されるヨーロッパや西側世界のたいていの人々にとって、賃労働は、十七世紀と十九世紀のあいだで鏡を突き破

⁴³ 原注 249 頁「奴隷労働とハンナ・アーレント」を参照。

⁴⁴ 原注 250 頁「ワークと教会」を参照。

⁴⁵ 原注 251 頁「貧困とワークに対する中世の社会的対応」及び原注 253 頁「貧困についての非経済的な知覚」を参照。

⁴⁶ 原注 254 頁。Ratger については、ADAM, August, Arbeit und Besite nach Ratherus von Verona, Freiburg, 1927 を見よ。

って、行くところまで行ってしまった。

○そこでは、賃金は貧窮の証明ではなく、その人が（賃労働者として）有用なことを示す証拠となった。賃金はサブシステムを補充するものではなく、それを支払う人々（資本家）によって、一定数の人口（労働者＝消費者）にとっての暮らしの本来的な源泉（原資）とみなされるようになった。それらの人々は、囲い込みの発展によって、（それまで身近なものであった）生存手段から排除されていったのである。

○イリイチはここで、1777 年、フランス北東部のシャロン・シュル・マルヌ（Chalon-sur-Marne）のアカデミーが課した懸賞論文の設問と、それに対する受賞回答を紹介している。

問：王権を利し、しかも貧しいものにも利益となるようなやり方で、物乞いの蔓延をいかに回避することができるか？

回答：数世紀にわたって、人々は知恵の石をさがしもとめてきた。それをわれわれは発見した。労働（work）である。賃労働こそは、貧しい者が豊かになるための本来の源である。

○イリイチは、この問題提起には、囲い込み⁴⁷の時代に急増した物乞いに対する価値観の変容や、（勃興する）ブルジョワ（階級）の価値観などが映し出されており、その回答は、おそらく無任有給聖職にある文士の手になるものであり、自らをホワイト・カラー労働者と思い込み、それが社会的に生産的であると考えてしまったこの論文の著者は、自分より高位にある人の物乞い（アカデミーの教師や高位聖職者の物乞いのことか？）に対して、自らの権利を主張するためにこう論じたのだとみている。⁴⁸

○またイリイチは、このテキストに錬金術思想の影響をみており、そこでは、自然は、自然を変質させる労働との接触によって、値段のつく商品とサービスになる。ただし、そこには労働以外に、資本と資源が関与して価値が形成されるので、それらを含む形を

⁴⁷ 原注 254 頁。

⁴⁸ ここで再び最近の柄谷行人の議論から、彼のプロレタリアート論を参照しておこう。柄谷が「プロレタリアート」として論じているのは正に「賃労働者」のことであり、人はしばしば自らの意志で好んでプロレタリアートになるのだが、多くの人はそのことの意味を認識していないか、忘却していることが指摘されている。この議論はイリイチを読む上でも参考になると思う。柄谷は次のように書いている。

「プロレタリアという語にはローマ以来の意味がつきまとっている。つまり、それは生産手段（土地）を失って、労働力しか売れるものがなくなった貧困者のイメージで語られる。しかし、たとえば、農民はたんに農業では生活できなかったから賃労働者になるのではない。むしろ、多くの場合、共同体の拘束から自由になるためである。ギルドの職人に関しても同じである。今日では、それまで家庭にいた女性が賃労働者になろうとする。それはたんに夫の収入だけでは生活できないからではなく、男性や家庭の拘束から自由になるためでもある。「労働力」の商品化は、こうしてつねに二重の意味をもつ。それは、個々人を自由にする。つまり、交換様式 A や交換様式 B による拘束から解放する。他方で、労働力商品の所有者としての個々人は、新たな拘束や服従を強いられる。いつ解雇されるかもしれない恐怖にさらされるし、事実解雇される。それでも、人々は共同体や家族に従属するよりも、労働力を売って生きるほうを好むのである。

それにしても、プロレタリアという語にはどうしても貧窮者というイメージがつきまとう。たとえば、生産手段をもった農民、商店、小生産者などは、自分の子供に後を継がせるよりも、大学にやって“サラリーマン”にさせようとする。それは子供をプロレタリアにすることなのだが、そうは考えない。今日、ホワイト・カラーと名づけられる階層の人たちは、紛れもなく賃労働者であるにもかかわらず、自身をプロレタリアだとは思えない。プロレタリアは貧しい肉体労働者だという固定観念があるからだ。」（柄谷行人『世界史の構造』280～281 頁）

とるようになり、それこそが、アダム・スミス、リカードからミル、マルクスに至る古典派経済学者の根本的な命題であると論じている。

- 「十八世紀末の錬金術的言語がマルクス⁴⁹の手で、当時流行の「媚態」⁵⁰という化学の言語に置きかえられた。価値にかんする錬金術的な知覚が、今日にいたるまで社会倫理の性格を決定しつつけている。経済学において、労働価値説が最初、効用説におきかえられ、ついでポスト・ケインズ派の思想におきかえられ、最終的に「経済学者たちは世界の本質的な性格をつかむのに失敗するような用語か、あるいはそれを誤って表現するような用語でこの世界を考えてきた」という現代的な反省をとまなう完全な混乱でおきかえられたにもかかわらずである。経済学者たちは労働について、ちょうど錬金術師が金について考えてきたのと同じように考えてきたのである。」(202~203 頁)
- 十八世紀中葉までのフランスの救貧院は、強制された労働が道德上の罪や犯罪にたいする刑罰であるという中世キリスト教の前提のもとで運営されていたが、その見解はプロテスタント・ヨーロッパや早く産業化された(北)イタリアの諸都市ではそれより一世紀前に棄て去られていた。
- オランダのカルヴァン派や北ドイツの^{ワークハウス}労役場では、なまけ者を救済し、命じられた労働をする意志を発達させるための組織や装備の先駆的な例をみることができる。そこでは、使いものにならない乞食たちを、役に立つ労働者にかえるという、中世のほどこしを与える代理機関を逆転した機能が見て取れる。そこでは懲罰としての労働が、入獄者が有用な労働者に変容するまで続けられる。イリイチは、これらの制度に義務的学校の真の先駆者をみている。
- しかし、これらの試みは必ずしもうまくいった訳ではない。十八世紀の貧窮者は、今日まで一般に「貧しく哀れな」者といわれているが、彼らに労働者としての適格性をあたえようとする努力に対して暴力的に抵抗したのであり、そのような群衆は依然として(政府の)統治の外にあったのである。
- 十九世紀のかなりあとまで、「経済的錬金術」の事業は下からの共感を得られていない。

⁴⁹ 原注 258 頁に以下のことが記されている。「マルクスがいつも使うメタファーは単純なメタファーとはほど遠い。実体的労働は生産物のなかに結晶化されている。つまり、それは生産物のなかに沈殿し、凝結される。それは形のないゼラチンのように存在する。それはある生産物から別の生産物へと移されてゆく。(中略) マルクスにとって、価値の顕現とは、もともと人間のなかに眠っていて、ただ産業的生産者へと変容することをとおしてはじめて喚起される能力の物質化にある。」

この議論にはギリシャ出身の哲学者、経済学者、精神分析学者であるコルネリウス・カストリアディス、Κορνήλιος Καστοριάδης, Cornelius Castoriadis (1922- 1997 年) の以下の著書が参照されているようである。CASTORIADIS, Cornelius, Valeur, Egalité Justice, Politique. De Marx à Aristote et d'Aristote à nous, Le Carrefours du labyrinthe, Paris: Seuil, 1978, pp.249-316

なお、カストリアディスは、クロード・ルフォールらと一緒にリバタリアニズム社会主義を標榜する組織を立ち上げ、雑誌 Socialisme ou Barbarie (『社会主義か野蛮か』) を創刊し、フランスの左翼知識人に大きな影響を与えた。

⁵⁰ コケットリー (英語: coquetry、フランス語: coquetterie) のことか? 一般には女性特有のなまめかしさのこと。フランス語の coq(オンドリ)に由来するが、社会学においては、男女間の権力関係において女性が男性に提示する媚態とされ、ゲオルク・ジンメルにより社会化の形式の一つとして研究され、フランスの社会学者ルネ・ジラールが欲望の理論として定式化されている。

「庶民は暴れ騒いだ。彼らは公正な穀物価格を要求しては騒ぎ、自分たちの地域からの穀物輸出に反対しては騒ぎ、負債のために囚われの身となった人々を保護しようとしては騒いだ。」(205 頁)

- 産業改善の庶民の群れは、トンプソン⁵¹が「道徳経済」⁵²と呼んだものを守り、この経済の社会的基盤にたいしてなされる攻撃に反対して暴動を起こした。そして、このような暴動の際に群衆をリードしたのは、しばしば女性であった。
- だが、このようにサブシステムの権利を守るために蜂起した産業化以前の群衆は、その後、必死になって賃金の「権利」を守る労働力へと変化していく。イリイチは、この転換をなしおおせたものこそ、家庭内への女性の囲い込みによって先鞭がつけられ、それを通して現実化した生産的労働と非生産的労働の分割による経済的分業化⁵³であるとみている。
- 「先例のない性の経済的分割⁵⁴、先例のない経済的な家庭概念、先例のない家事領域と公的領域とのあいだの対立によって、賃労働が生活に不可欠な随伴物となった。これらすべては、働く男たちが各自の家庭の主婦の番人となり、またこの保護の役がわずらわしい義務となることによって、達成されたのである。」(206 頁)
- では、サブシステムのための苦闘はどうして突如棄て去られることになったのか。また、この苦闘の終焉はなぜ知られることがなかったのか。
- イリイチは、この設問に答えるためには、このサブシステムの放棄と同時に起こった〈シャドウ・ワーク〉の創出と、いわゆる科学的に発見された女性本来の性質からして女性はずっと家事労働をする運命にあったという理論の二つに光を当てる必要がある、という。
- 女性は、「歩き回るフルタイムの子宮として内密に再定義され」、それが女性の「本質」とされて、女性を新たな家庭（サブシステムに支えられた世帯の維持に寄与する一切を締め出す一方、それと同じくらい女性の賃労働を冷遇するような家庭）での活動に縛り付けるようになる。
- サブシステムに対してブルジョワが仕掛けた撲滅運動は、経済的に分割された男性と女性を構成員とする労働者階級が成立した時、はじめて大衆の支持を得ることにな

⁵¹ エドワード・パーマー・トンプソン、Edward Palmer Thompson (1924-1993 年) は、イングランドの歴史家、社会主義者、および平和運動家。18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての、英国のラディカルな社会運動をめぐる著作、『イングランド労働者階級の形成』(原著: 1963 年) として最も有名だが、彼はまた、ウィリアム・モリスの伝記 (1955 年) およびウィリアム・ブレイクについての研究書 (1993 年、出版は彼の死後) を出版しているほか、多産なジャーナリスト、エッセイストでもあり、さらには『シカオス文書』という SF 小説や詩集を出版している。共産党の知識人メンバーの一人であり、1956 年年のハンガリーへのソヴィエト軍の侵攻の対処をめぐって離党することにはなったが、1950 年代末期の英国における第一次ニューレフトにおいて重要な役割を担った。彼は、1964-70 年および 1974-79 年の労働党政府に対する、意気軒昂な左翼・社会主義の論客であり、1980 年代には、ヨーロッパにおける反核運動を先導する知識人であった。

⁵² 原注 259 頁「道徳経済」を参照。

⁵³ 原注 260~262 頁「混同してはならない、労働の分割=分業にかんする四つの問題点」を参照。

⁵⁴ 原注 262~264 頁「性 (セックス) による分業」を参照。

る。そこでは男性は自分の雇用主と共謀し、共に経済の拡張に関心を持ち、サブシステムの抑圧に関与していった。そして、そのような資本家と賃労働者の結託関係は階級闘争という儀式によって隠蔽されていった。そして男性は、賃金への依存度を高める家族の長として、社会が正統とみなす労働のすべてを負わされ、不生産的な女性から絶えず強要されていることを感得させられた。

- そして、その「家庭において、また家庭をとおして、産業的な労働の二つの相補的形態、すなわち賃労働と〈シャドウ・ワーク〉とが結びあうことになった。」(207 頁)
- そうして〈シャドウ・ワーク〉そのものが、資本集約的なものとなったが、その実態は一貫して秘匿されており、今日でも〈シャドウ・ワーク〉を取り巻く四種の神秘化が横行している。

- 〈シャドウ・ワーク〉をめぐる第一の神秘化：生物学に訴える覆い隠し。

女性の役割を母としての主婦の座に格下げし、男性に就職口をあさることを可能にする必然的な条件だと述べる仮説は、四つの学問分野によって正当化されている。

- ①動物行動学による家族の役割をサルの世界に投影するこのよって女性の役割を規定する覆い隠し。
- ②人類学の還元主義的な自己投影に基づく、女が家庭を守る者とされてきた例証の収集。
- ③社会学による機能主義的な両性の役割構造の説明。
- ④社会生物学による女性の行動が男性適合的であるという説明。

イリイチは、ここに生じているのは、それぞれの文化に固有の^{ジェンダー}性に基づく仕事のふりわけと、十九世紀的な労働観念に基づく現代的な経済的二分岐の混同という「基本的な取り違い」(209 頁)だと指摘している。

- 〈シャドウ・ワーク〉をめぐる第二の神秘化：「社会的再生産」との混同。

「社会的再生産」という用語は、マルクス主義者たちによって、自らの労働概念に合致しない活動ではあるが、それが誰かがしなければならない雑多な活動と呼ぶのに使われているが、それは的確さを欠いたカテゴリーであり、それはむしろサブシステムの諸活動に適用されるべきものである。社会的再生産という語は家庭の周辺で行われる活動のほとんどを含んでいるので、女性がサブシステムの経済のために行う基本的かつ重要な貢献と、女性が産業的労働の再生産のために無報酬で徴用されること、つまり、不生産的な女性は「再一生産」ということで慰撫されるということとの差異を把握する試みの妨げとなるのである。

- 〈シャドウ・ワーク〉をめぐる第三の神秘化：市場外の雑多な行動様式に〈影の価格〉をあてがうこと。

今日、支払われない活動はすべて、インフォーマルな部門の中に溶け込まされている。その支払われない諸活動(犯罪、レジャー、学習、生殖、差別、選挙、結婚等)に影の価格をあてがうという形で経済モデルを組み立てることは、性^{セックス}を機軸として女性の諸

活動を資本の蓄積へと回収する経済学にパラダイムを提供することになる。イリイチは、その具体例として、ゲイリー・S・ベッカー⁵⁵が「均衡状態にある^{セックス・マーケット}性の市場」という仮定から出発して、「配偶者間での産出物の分配」を説明する公式を導き出している（211頁）こと等を挙げている。

○〈シャドウ・ワーク〉をめぐる第四の神秘化：家事^{ハウスワーク}について論じるフェミニスト主流派によるもの。

フェミニスト主流派の女性たちは、家事が重労働であることを知っており、それに対して支払いがないことに腹を立てている。さらにその内の幾人かは、「女性の仕事が「非生産的」であり、しかも「本源的蓄積の秘密」⁵⁶の主要な源泉をなしており、これこそ全知マルクスを当惑させていたひとつの矛盾であると信じこんでいる。」（212頁）

イリイチは、彼女たちは二重の盲目に陥っているという。ひとつは、成長をめざして階級の敵が仕組んだ十九世紀の陰謀に対しての盲目であり、今ひとつは、両性間の経済的平等のために彼女たちが家庭内に持ち込む二十世紀の争いによって十九世紀の陰謀が強化されてしまうことに対しての盲目である。

イリイチは、この家庭内闘争の係争点は、社会一般における抽象的な^{セックス}性の役割をめぐるものとなっており、それは差別の所在を明らかにすることとともに、支払われない労働の不名誉性を公にすることに役立っているが、現代の女性が、経済的な見地からみて報酬が支払われていないということに加え、サブシステムの見地からみても実を結ばない労働を強いられ、それ故に「かたわ者」（213頁）にさせられているという事実を覆い隠してしまう結果となっているのではないか、という。

○そしてイリイチは、ここで新たな歴史家たちへの期待を語っている。彼らは「子どもの

⁵⁵ ゲーリー・スタンリー・ベッカー、Gary Stanley Becker(1930-2014 年)は、アメリカ合衆国の経済学者。シカゴ大学経済学部、社会学部、そして同校ブース・ビジネススクールにて教授職を勤める。従来、金銭や経済問題だけを分析してきた経済学の適用範囲を、極めて広範かつ多様な人間行動・社会問題に拡張し、それに基づく多くの政策提言を導き、現実の政策に大きな影響を与えてきた。経済学の分析手法を家族・差別・犯罪・麻薬・政治など様々な社会問題に応用した最初の経済学者の一人であり、1970年代にはジョージ・スティグラーとともに価格理論による嗜好の表現方法を洗練し、それまで経済における市場行動の分析に限られていた新古典派経済学の枠組みによってあらゆる人間行動が合理的な選択の結果として分析できることを提唱した。人的資本のパイオニアの一人としても知られる一方で、ロバート・バローらと共に出生行動や結婚の経済分析を確立した。またソースティン・ヴェブレンの顕示的消費やシャルウィン・ローゼン(文化経済学のパイオニア)に由来するスター現象を価格理論によって説明付けようという試みもシカゴ大学同僚のロバート・フランクらとともにやっている。その他、進化論による価格理論の生物学的基礎付けも行っていた。

⁵⁶ マルクス『資本論』第一部第七篇第二四章第一節「本源的蓄積の秘密」、マルクスはここで、本源的蓄積を聖書の創世記の件に擬して次のように語っている。「資本の蓄積は剰余価値を前提とし、剰余価値は資本制の生産を前提とし、資本制の生産はまた、商品生産者の手における比較的多量の資本および労働力の現存を前提とする。だから、この全運動は循環論法的にどうどうめくりするように見えるのであって、それからのがれるためには、われわれは、資本制の蓄積に先行する「本源的」蓄積(アダム・スミスのいう「先行的蓄積」)を、すなわち、資本制の生産様式の結果でなくその出発点たる蓄積を、想定するほかはない。この本源的蓄積が経済学で演ずる役割は、原罪が神学で演ずる役割とほぼ同じである。アダムが林檎にかみつくと同時に、罪なるものが人類をおそった。この罪の起源は、過去の小話として語られることによって説明される。(中略)なるほど、神学的原罪の昔話は、人間はどうして自ら額に汗してパンを食わねばならぬような宿命におかれたかを語ってくれるが、経済学上の原罪の物語の方は、そんなことをする必要のない人々がどうして存在するかを暴露してくれる。」(長谷部文雄訳、河出書房新社「世界の大思想 18 資本論1、560-561頁」)

誕生、母乳による養育、家の清掃、売春、婦女暴行、よごれものの洗濯や話し方、母の愛、幼年期、避妊、更年期」を研究し、婦人科医や建築技師、薬剤師等の専門家が、その雑多な対象の中から様々な症候をつくり出し、目新しい療法を売り出すようになったかを明らかにしてきた。

○そのような歴史家たちの探求は、産業的労働を覆ってきた〈シャドウ〉を拭い取り、それをいいあらわす新たな用語を探すことの禁制を打ち毀す。

○これらの女性を親しく観察する歴史家たちが着目するのは、「家事^{ハウスワーク}が独自に（*sui generis*）存在する」（214 頁）という事実である。彼らは、「この独自の労働が賃労働とともにいかにしてヨーロッパの境界をこえて輸出されたかを」説明し、「女性が労働市場で男性に次ぐ第二の地位を得たところではどこでも、彼女たちの仕事は、それが支払われない場合は、深刻な変化を受けたこと」（215 頁）を観察している。そして、その動きと並行して、そのような制度の枠からはみ出た専業主婦^{ハウスワイフ}⁵⁷が登場することになる。

○家事の性格の変容は、アメリカ合衆国において顕著で急激なものとして現れた。1810年代まで、合衆国の世帯は圧倒的に自己充足的であり、女性は男性に劣らず家計の自己充足性を支えており、男性とほぼ同一の収入を家庭にもちこんでいた。当時まで男性と女性の経済的地位は同等のものであり、しかも財布の紐を握っていたのはたいてい女性だった。

○けれども、1830 年までに、このような状況は大きく変貌してしまった。商業的農場経営がサブシステムの農業にとってかわり、生活給が一般的になって、臨時の賃仕事に依存することは貧しさの表徴となった。女性は、女主人の立場から、就労前の子どもたちが住み、夫が憩い、夫の所得が消費される場所（核家族）の守人（専業主婦）となってしまった。

○アン・ダグラスは、このような女性の状態変化を、制度の枠外に置かれた一種の職務解任と呼んでいる。女性は、経済的な平等とともに、投票権を含む数多くの法的権利を失い、伝統的な公益の場から姿を消し、産院は男性の産科医にとって変わられ、新しい職業へと通じる道が閉ざされていることを知った。そうして「サブシステムの基盤を奪いとられ、労働市場では限界の地位にあって欲求不満をおこしかねない家庭主婦の役割は、市場の強制された消費を組織化することになった。」（217 頁）

○新たな歴史家たちは、表面的には女性の「仕事」に注意を集中することで、サブシステムを破壊する戦争における敗者として語る歴史、経済の明かりに照らし出されない影の部分で遂行された「仕事」の歴史、その「仕事」をすることを余儀なくされた者によって書かれた歴史を提供している。

○イリイチは、ここに〈シャドウ・ワーク〉という用語を、現代の家事をひな型とする社会的現実を指し示すものとして提案し、それが晩期産業社会に蔓延するだろうと予言

⁵⁷ 原注 269～273 頁「ミストウレスから専業主婦へ」を参照。

している。

- 〈シャドウ・ワーク〉への繫縛は、性で結ばれた経済的なつながりを通して達成された。十九世紀に生じた市民的家庭（市民社会）が、サブシステムを中心とするそれまでの生産＝消費の場としての家⁵⁸にとってかわった。市民的家庭は、専業主婦と労働する男が相互に補完し合うことで不能になってしまうような結びつきとなり、それは強制された消費単位として資本家や人民委員^{コミッサール}の利益を生み出す。
- 「専門的職業はつねにそのサービスへの依存の必要を前提とするものだが、そうした必要を専門的職業に可能にさせるものはすべて、対応する〈シャドウ・ワーク〉を顧客にたいしてきわめて効果的に押しつけることになる。こうした無能力化を推進する専門的職業の典型例は、医療科学者と教育者である。彼らはその顧客サービスの消費という〈シャドウ・ワーク〉を押しつけ、直接にまたは税金をとおして顧客の収入から支払い⁵⁹を受ける。」（219 頁）
- 「専門的に管理されるものとなった〈シャドウ・ワーク〉の創出は、社会の中心的な仕事^{ビジネス}になってきている。賃金を支払われて〈シャドウ・ワーク〉の創出に従事しているのは、今日のエリートたちである。」（220 頁）
- 〈シャドウ・ワーク〉の発見は、一世代前に民衆文化と農民^{ベザント}とが歴史の主題として発見されたこと、即ち、貧民とその生活様式、貧民たちの考え方や世界観を研究することで弱者と無学の者のサブシステムを歴史研究の領野の中に持ち込んだことと同じくらい重要なことである。
- 主として産業化の衝撃をこうむった女性に負わされた影の領域＝〈シャドウ・ワーク〉の発見は、アンドレ・ゴルツ⁶⁰が「ポスト・プロレタリア」と呼んでいるものを歴史の主題とすることになるだろう、とイリイチは言う。
- イリイチにとって、専業主婦の創設は、前例のない隔離^{アバルトヘイト}体制の証であり、それは産業労働と結託して、われわれの時代の、未だ検討されざる生活を覆い隠すタブーを守護するように機能するものである、という。

⁵⁸ 原注 239～240 頁「家(the Household)の歴史」を参照。

⁵⁹ 原注 243～245 頁「〈シャドウ・ワーク〉のための支払い」でイリイチが主張したいのは、「新しい賃労働の創出が、新たに〈シャドウ・ワーク〉をいやおうなしに発生させることだ。新しい社会的なサービスは、いやおうなしに顧客の抑制された従順さを増加させる。なお悪いことに、影の労働者たちは、他人の〈シャドウ・ワーク〉を創り出すものなのである。」と述べている。

⁶⁰ アンドレ・ゴルツ、André Gorz(1923- 2007 年)は、フランスの哲学者、ジャーナリスト、小説家。1964 年、Le Nouvel Observateur を創刊するため L'Express を辞める。彼の社会主義を実存主義の見地から、種々の体制(国家、学校、会社、家庭など)がいかに人間の自由を制限しているのかを告発するようになり、やがてエコロジーの動きと同調するようになる。彼の考えの底には、経済主義、功利主義、生産者第一主義に強く反対するものがあり、功利・快楽主義的個人主義、物質主義・生産重視主義的集産主義に批判的であった。個人の内的規範に基づく行動を擁護し、環境絶対主義的な見方ではなく、より広い視野に立ち人間的な環境を重視する立場を採った。後にそれをさらに進め、賃金労働者のいない社会主義ユートピアとの融合を示唆するようになる。1983 年には、アメリカが西ドイツに核ミサイルを配備する際に、彼らは自由の上に命を置いたのだ、として反対せず、平和主義の流れとも別れ、Le Nouvel Observateur も辞めることになる。最後の著書、2006 年の "Lettre à D. Histoire d'un amour" 『また君に恋をした』(水声社、2010 年)は妻に捧げたものだったが、その翌年不治の病の妻と共に心中している。享年 84 歳。

○イリイチは、「人々が自分自身を破滅させる行為へと参加するように組み立てられた社会組織」は散文によって正しく言い表すことができないとして、パウル・ツェランの『死のフーガ』⁶¹が召喚されている。

⁶¹ 『死のフーガ』(飯吉光夫編・訳『パウル・ツェラン詩文集』白水社 2012 年 2 月より)全文を引用する。

あけがたの黒いミルク僕らはそれを夕方に飲む
僕らはそれを昼に朝に飲む僕らはそれを夜中に飲む
僕らは飲むそしてまた飲む
僕らは宙に掘るそこなら寝るのに狭くない
一人の男が家に住むその男は蛇どもをもてあそぶその男は書く
その男は暗くなるとドイツに書く君の金色の髪マルガレーテ
彼はそう書くそして家の前に歩み出ると星がまた星が輝いている
彼は口笛を吹いて自分の犬どもを呼び寄せる
彼は口笛を吹いて自分のユダヤ人どもを呼び出す地面に墓を掘らせる
彼は僕らに命令する奏でろさあダンスの曲だ

あけがたの黒いミルク僕らはお前を夜中に飲む
僕らはお前を朝に昼に飲む僕らはお前を夕方に飲む
僕らは飲むそしてまた飲む
一人の男が家に住む蛇どもをもてあそぶその男は書く
その男は暗くなるとドイツに書く君の金色の髪マルガレーテ
君の灰色の髪ズラミート僕らは宙に墓を掘るそこなら寝るのに狭くない

男はどなるもっと深くシャベルを掘れこっちの奴らそっちの奴ら歌え伴奏しろ
男はベルトの拳銃をつかむそれを振りまわす男の眼は青い
もっと深くシャベルを入れるこっちの奴らそっちの奴らもっと奏でろダンスの曲だ

あけがたの黒いミルク僕らはお前を夜中に飲む
僕らはお前を昼に朝に飲む僕らはお前を夕方に飲む
僕らは飲むそしてまた飲む
一人の男が家に住む君の金色の髪マルガレーテ
君の灰色の髪ズラミート男は蛇どもをもてあそぶ

彼はどなるもっと甘美に死を奏でろ死はドイツから来た名手
彼はどなるもっと暗鬱にヴァイオリンを奏でろそうしたらお前らは煙となって空に立ち昇る
そうしたらお前らは雲の中に墓を持てるそこなら寝るのに狭くない

あけがたの黒いミルク僕らはお前を夜中に飲む
僕らはお前を昼に飲む死はドイツから来た名手
僕らはお前を夕方に朝に飲む僕らは飲むそしてまた飲む
死はドイツから来た名手彼の眼は青い
彼は鉛の弾丸(たま)を君に命中させる彼は君に狙いたがわず命中させる
一人の男が家に住む君の金色の髪マルガレーテ
彼は自分の犬を僕らにけしかける彼は僕らに空中の墓を贈る
彼は蛇どもをもてあそぶそして夢想にふける死はドイツから来た名手
君の金色の髪マルガレーテ
君の灰色の髪ズラミート

翻訳者の解説:ツェランの詩の代表のようにいわれている詩である(ドイツのギムナジウムの教科書にも載っている)。強制収容所の詩という前提をつけた方が分かりが早く、その上でなら詩の意味もすぐ理解できよう。「僕ら」というのは、強制収容所(ツェランが収容されていたのは実際は強制収容所ではなく、それよりは軽度の労働収容所ではあるが)にとらえられている囚人たち。彼らの日々単調な労働生活が効果ある反復のリズムとなって読む者の胸に促々と迫ってくる。囚人たちは理不尽な仕打ちを受けているために、その精神的結果である矛盾した言いかたが処々に現われている(「黒いミルク」、「君の金色の髪マルガレーテ」——ドイツ人にとっての——と「君の

- イリイチは言う「産業社会とはその犠牲者なしには済まされない社会である。」(223 頁)と。それはまた、「その犠牲者に、管理をとおしての抑圧に協力する対象となることを強いる。」そして、この社会におけるあたりまえの幸福の条件は、助けられ、救済され、または解放されなければならない者にたいして感傷的な関心を持つことである、とされている。
- その感傷主義^{センチメンタリズム}、それをイリイチは、産業社会のなかでイデオロギーと信仰の基層に横たわる一種の複合現象とみている。
- それは、産業社会の諸活動によって破壊されている諸価値こそ、産業社会が育てているのだと表明し、サブシステムの基盤に帰すべき諸価値こそ経済成長の持続可能性のためになくしてはならないものだと強弁しつつ、実際には、それらを経済の影法師へと変化させている。
- 感傷主義は、そのようにして、生産と消費の対立のなかで、暗黙のうちに、サブシステムへの郷愁をあやつることで、隔離体制を首尾よく処理し、その郷愁をかきたる「サブシステムの基盤」として表明されたものによって、ヴァナキュラーな領域の反対側にある経済の影を日々増大させているのである。

(以上)

灰色の髪ズラミート」——ユダヤ人にとっての——との並置など)。蛇をもてあそぶ男は、ナチの将校である、彼は同時に故郷の恋人にあてて手紙を書く、——こうしたシーンは、ひとところピアノを弾くナチ将校のイメージでわれわれの間にも定着したことがある。甘美さと残酷さの同居。しかし、このような相反するトーンの混在はわれわれの日常生活の中ではむしろ普通である。アウシュヴィッツの将校がピアノを弾いてもかまわないし、アウシュヴィッツのような残虐事のあとで詩人が詩を書いても、それは人間社会の平常時で不都合ではない。この意味で「アウシュヴィッツのあとに詩を書くのは野蛮だ」というアドルノの定言は当たっていない。したがって、ツェランのこの詩のそれとは別の「甘美さ」に関する批判、つまり、ツェランは残酷なはずの強制収容所内の状況を甘美に歌うという誤りを冒した、というようなこの詩の発表当時(1950 年代)の一批評家の批判もまた、いわれなきものだろう。